

# DX時代における持続可能な海外教育研修を目指して —ニューヨーク国連研修オンライン実践と参加学生の動向分析—

生 田 祐 子  
(文教大学国際学部)

Towards Sustainable Overseas Study Program in the DX Era :  
Needs Analysis of Participants in the Remote UN Study Program from New York

Yuko IKUTA  
(Faculty of International Studies, Bunkyo University)

## 要 旨

2021年3月に国際学部ニューヨーク国連研修を国連本部とロイターの協力により、オンラインで3日間実施し6学部からのべ約200名の学生が参加した。プログラム内容と申込者の傾向を参考に、参加者を対象に事後調査を実施し参加学生の動向を分析した。その結果、SDGsの目標4「全ての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供する」へ取り組むという視点からも、今回の研修は学生の自律的な学習教育環境として有効であり、学部横断的に国際問題や英語で行う講義に関心の高い学生のニーズに応じる機会であったと推察する。

## 1. はじめに

コロナ禍のため、教育におけるSociety 5.0/DX（デジタルトランスフォーメーション）に対応するスピードが増している。一方、「誰一人取り残さない（Leave no one behind）」を理念として国際社会が目指す「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」の17の目標達成には逆風が吹き、現代社会は経済環境も極めて予測困難な状況に直面している。感染症のほかにも、気候温暖化が影響を及ぼすと考えられる災害、国家や地域間の対立や紛争など地球規模の複雑な要因により、外務省が発出する海外渡航の危険情報レベルが今後も高く、研修実施が困難になる事態が想定される。

この状況下、グローバル教育を推進する大学の現場では、カリキュラムを補完する大事な役割を海外研修が担ってきているため、オンラインでの代替プログラムに注目が集まっている。これは、COIL (Collaborative

Online International Learning) 型教育としてICTを用いたオンラインで海外大学や連携機関との交流を行う教育手法のことである。既存の授業科目や留学プログラムをより充実させる手段として、活用がコロナ禍以前より期待されていた。(文部科学省, 2018)

国際学部においては、2020年度の海外研修は全て中止されたが、年度末（2021年3月）にニューヨーク国連研修を国連本部とロイター社の協力を得て、試験的に3日間のプログラムとしてオンラインで実施した。今回の研修実施前と参加学生を対象に行なった研修事後調査から、研修への学生の関心やニーズが浮かび上がってきた。その結果をもとに持続可能な海外研修への環境作り及び課題を検証し、これからの大学は、どのような教育環境を作り出すことで学習者を支援できるかを考察する。

## 2. ニューヨーク国連研修の目的と背景

国家間の利害が複雑に絡む国際情勢に対して、国連の対応が国内メディアでもしばしば批判されるが、具体的な国連の役割や現場での取り組みを知る日本人は少ない。この研修の目的は、国連の活動と世界が直面している問題をより正しく理解することである。そのために、実際に緊迫する世界の諸問題の解決に向けて、第一線で仕事をしている国連職員から現場の話聞き、国連本部施設の見学や会議の傍聴を行なっている。ニューヨークに滞在する研修では、国連本部での3日間の研修に加えて、国連日本政府代表部、米国メディア（ロイター通信や日系の新聞社）や大学（コロンビア大学やペンシルベニア大学）訪問と学生との交流、JETRO等の企業研修を通して、国際的な視野を広げる機会を提供している。

2012年3月文教大学（国際学部）が「国際連合アカデミックインパクト（UNAI）」加盟校として承認されたことにより、その活動の一環として行う「ニューヨーク国連研修」は国際学部の「海外研修E」の単位として認定されている<sup>1)</sup>。研修のパイロットプログラムは、2006年2月に筆者の専門ゼミナール履修生及び希望学生を対象に実施し、その後、国連アカデミック（UNAI）委員会（旧ボランティア委員会）を経て国際交流・UNAI委員会が主幹する研修プログラムとしている。当研修は、コロナ感染拡大でニューヨークがロックダウンする直前の2020年2月末まで15年間連続で実施され、現地7日間のプログラムに参加した学生総数は200名を超える。引率業務に関わった国際学部教員は筆者を含め7名である。その間に研修を支援する国連本部広報局と文教大学との連携が構築され、2021年3月のオンライン実施の企画も速やかに実施が可能となった。

## 3. オンライン研修プログラム

2021年3月1日～3日（3日間）に次の内容で実施した。ニューヨークと14時間の時差（冬期）があり、日本での実施時間帯は深夜と朝となった。今回のオンラインでの実施は、代替としての研修ではなく単位認定はできないが、学生の参加費用の負担を無くした。国連事務局へ支払う事務手数料等は国際学部国際交流・UNAI委員会が負担した。プログラムとスケジュールは次のとおりである。時間は日本時間で表示している。

### Monday, March 1

#### 21:00 Orientation

（講師紹介、Zoom英語字幕設定、同時通訳設定の確認等を含む）

担当：筆者と2名のT.A.

#### 22:00 U.N. Virtual Tour

（国連本部見学ツアー）

言語：英語（英語字幕と日本語への同時通訳）

講師：Ms. Daria Howard and Ms. Yueyue Jiang (Emily)（国連広報局職員）

#### 23:00 Briefing 1:

Disarmament（国連と軍縮）

言語：日本語

講師：Mr. Tsutomu Kono

（国連軍縮局上級政務官）

### Tuesday, March 2

#### 22:00 Briefing 2:

Sustainable Development（持続可能な開発）

言語：日本語

講師：Ms. Hiroko Morita-Lou

（国連経済社会局元職員）

#### 23:00 Briefing 3:

UN Career Development（国連や国際機関の職員になるためのキャリア形成）

言語：英語（英語字幕と日本語への同時通訳）

講師：Ms. Elizabeth Waechter

（国連広報局代表）

Wednesday, March 3

10:00

New York Virtual Tour and Cross-cultural

Experiences（ニューヨーク異文化体験）

言語：英語+日本語

講師：我謝京子（ライター記者）

#### 4. 研修参加申込者の傾向

研修案内と研修参加申し込み先（Google Form）を、2月上旬に大学のホームページと国際交流課から全学生に対してメールで周

知を行ない、先着順で100名まで受け付けた。文教大学関係者の申し込みは94名（8名は教員）で残りは研修実施関係者6名であった。

今回の参加希望者は、次の図1と2が示すように文教大学の6学部と全学年の学生から申し込みがあった。国際学部以外では、文学部からの参加申し込み者が際立って多かった。学年については、1年生が最多であるが2年生、3年生の申込者もほぼ同数である。学生の関心事を把握するために、希望進路を複数可として選択させた。外資系や国際機関への関心は高く、教員志望者が4分の1程度いる。その他の項目に記載した内容も1.1%として反映されている。（図3）英語力の目安を選択させたところ、30%以上が600点（L&R）

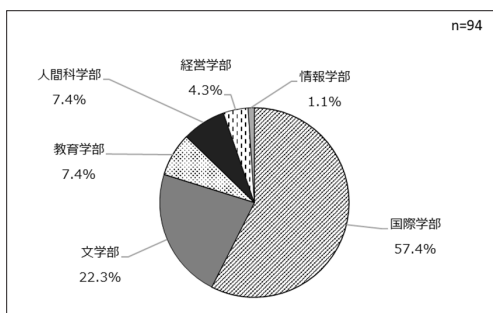


図1 申込者の所属学部

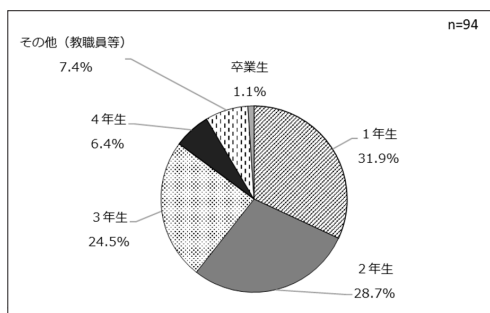


図2 申込者の学年

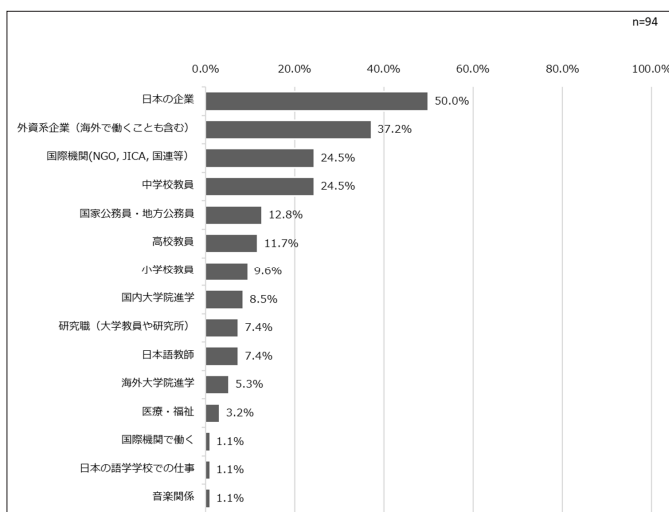
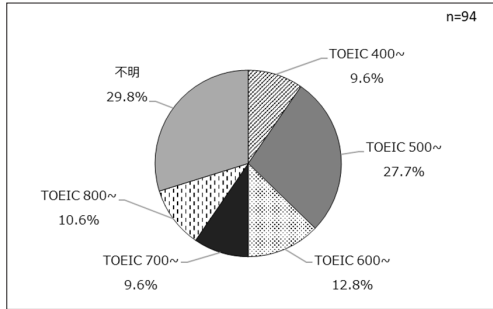


図3 申込者の希望進路



(図4 申込者のTOEIC (L&R) 点数 (自己申告に基づく))

以上の回答をしている傾向から参加申し込みをした学生の英語力の目安はCEFR<sup>2)</sup>のB1-B2 (自立した英語使用者) であると考えられる。(図4)

## 5. 研修プラットフォーム

オンライン会議では国連はMicrosoft Teamsを原則使用しているが、この研修ではZoomでの実施が許可された。文教大学教員2名がZoomのホストと共同ホストとなり、参加者のオンライン上でのトラブルや質問に対応するために、Teaching AssistantとしてICTに詳しい卒業生1名と学部生1名がZoom上に常時待機していた。講師の手配は国連側が行っているため、国連広報局の職員も常時Zoomに待機し、時間管理と進行を確認していた。New Yorkと日本の時差14時間 (冬時間) を考え、国連本部職員の勤務時間に合うように日本時間では午後9時からの開催となった。ロイター記者の場合は、現地時間の午後8時開始が可能となり、日本側は午前10時からの参加となった。このように現地時間に合わせた研修実施は、現地の時間を実感できる心理的なメリットもあり、学生は比較的深夜開催に適応している傾向があった。しかし、開催中待機しなければならない教職員の負担は大きかった。

## 6. 国連研修の言語とZoom通訳機能

現地での国連職員によるブリーフィング

(講義) は原則英語であるが、今回の準備段階では学生の英語力が把握できなかったため、日本語と英語を半々とした。英語による研修時はZoomの言語機能を利用し、英語字幕 (読み上げ機能) への自動変換機能と、同時通訳のチャンネルを設定し、筆者自身が日本語への同時通訳を行なった。しかし、進行係が通訳者として別のチャンネルに入ってしまうとZoom全体のチャンネルから外れるため、2人のTAにZoomをホストする権利を渡すことで全体の管理を任せた。機能的には国際会議場の同時通訳システムと変わらないほどZoomの通訳機能は利便性が良いため、通訳人材さえ確保すれば世界中どこからでも通訳に入ってもらうことが可能となった。ラジオのFM周波数を調整しながら簡易的な同時通訳をしていた時代と比べると隔世の感がある。今後は学生の中から通訳ができる人材を育てたいと願っている。

## 7. 研修参加者への事後調査

研修終了1週間後に、研修に参加した学生参加者を対象にGoogle Formで事後アンケートを実施した。申し込み数は94名であったが、Zoom上の人数表示によると実際に参加した学生はプログラムごとに60-80名の間を推移していたと思われる、3日間の延べ人数は約200名であった。期日までに回答のあったアンケート回答者数は32名、回答率は半分以下であった。調査した主な内容は、参加したプログラム、研修時間、言語の割合、英語の理解度と通訳の必要性、オンライン研修への関心度、英語力及び使用頻度、参加学生の属性である。

## 8. 調査項目と結果

### 8.1 次のどの研修プログラム (日時) に参加したか。

図5によると、回答者の71.9%が3日間全部のプログラムに参加した。3日目のロイター

の我謝氏によるニューヨーク異文化体験の印象が最も良いが、深夜に及ぶ前日のプログラムに続いて翌朝午前10時の開催となったこ

とで、参加者が少なくなった可能性も考えられる。

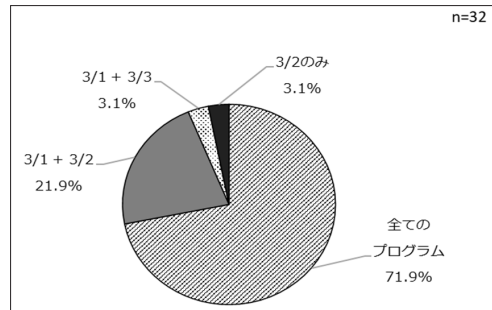


図5 参加した研修プログラム

## 8.2 研修プログラムで良かったと思うものはどれか。

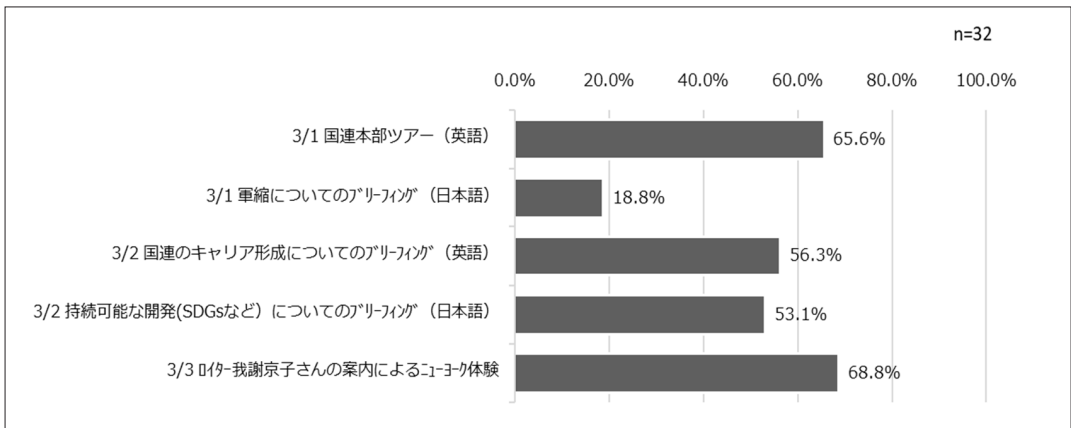


図6 良かったと思う研修プログラム

8.3 Q研修の実施時間について：日本時間の深夜と午前中では、どちらの方が出席しやすいと思うか。

8.4 日本語と英語の割合について次のどれに近いか。

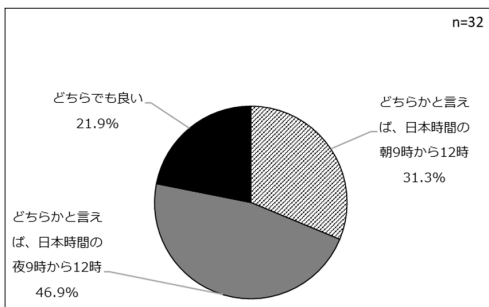


図7 研修の実施時間について

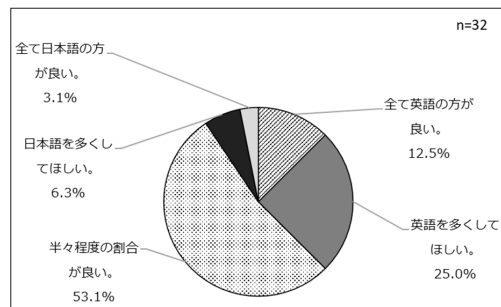


図8 日本語と英語の割合

### 8.5 英語の研修時に日本語通訳を聞いたか。

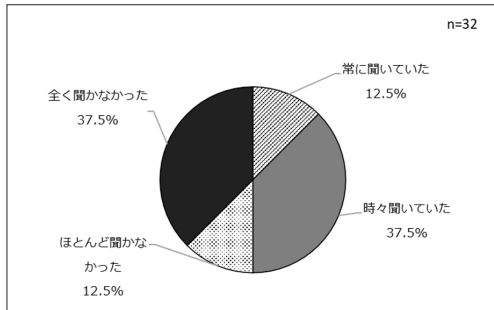


図9 日本語通訳

### 8.6 英語の研修内容の理解度は次のどれに近いか。

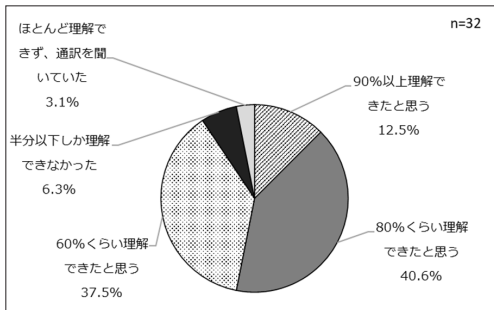


図10 英語の研修内容の理解度

図8~10によると、半数以上の学生が英語のブリーフィング（講義）中に同時通訳を聞くことなく理解できたと答えているため、参加者の英語力の目安はCEFRのB1-B2と推測するが（図13）、リスニング力は相対的に高いと考えられる。今回の講師たちが話す英語が非常に明瞭でゆっくりだったことも、通訳なしで多くの学生が理解できた要因だと思われる。日常での英語使用状況を尋ねたところ、授業以外に全く触れる機会がない学生が37.5%いる一方、毎日使用する学生も18.8%いるため、学生の英語環境や学習動機付けの機会に大きな差が生じているかもしれない。

### 8.7 今後の研修への参加意思

Q. 今後もこのようなオンライン研修に参加したいと思うか。

Q. 将来機会があれば、ニューヨークでの研修に実際に参加したいと思うか。

Q. 今回の研修は皆さんの進路を考える上でのどのくらい影響があったと思うか。

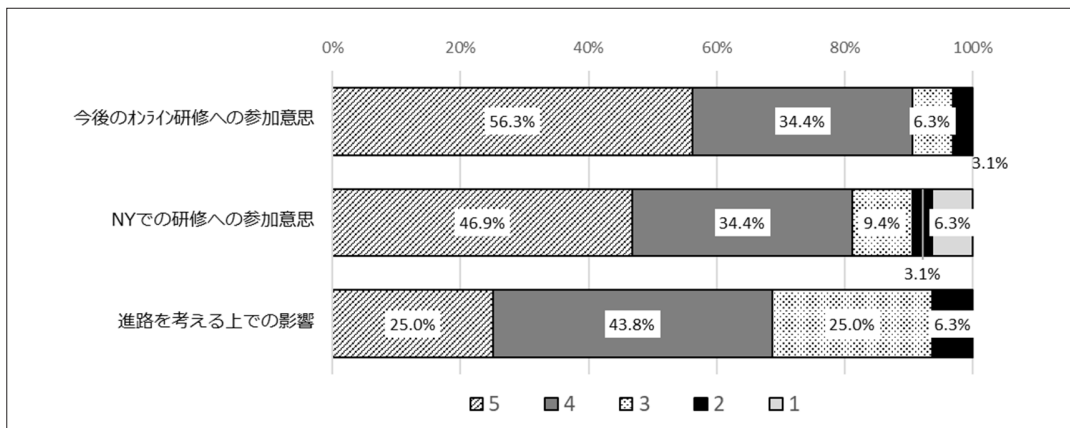


図11 今後の研修への参加意思等

## 8.8 英語の使用状況

Q. 皆さんの英語の使用状況は次のどれに近い  
 いか。話す聞く読み書きのいずれかを含む。

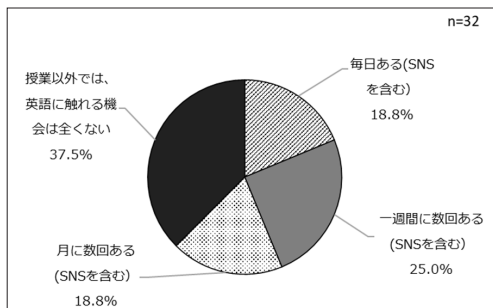


図12 英語の使用状況

## 8.9 現在の英語力

Q. 現在のご自分の英語力は、次のどの段階に近いかと考えますか。

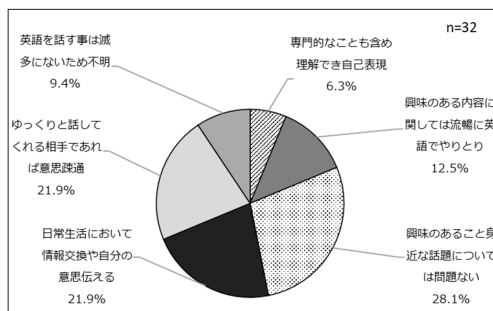


図13 現在の英語力

## 8.10 回答者の属性

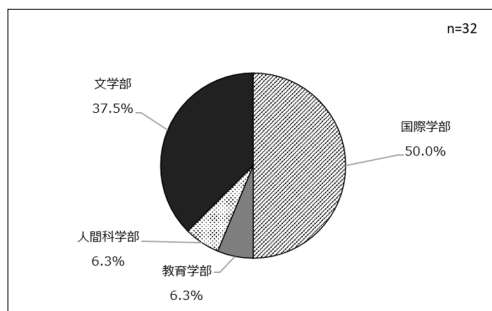


図14 学部別

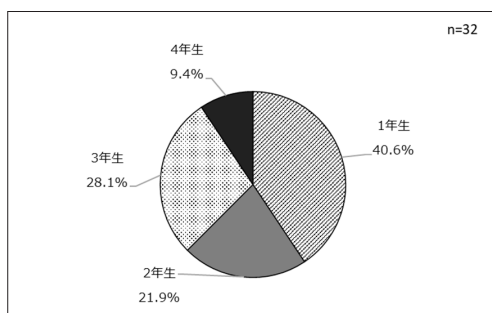


図15 学年別

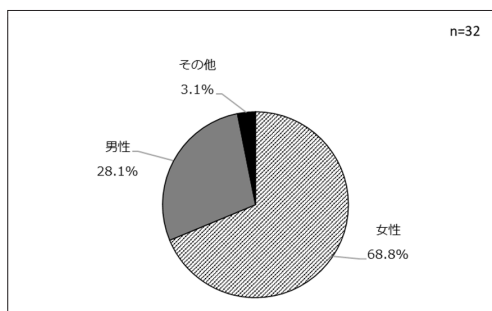


図16 性別

### 8.11 自由記述（感想）結果

最後に自由に記述させた感想のテキスト全体に対してテキストマイニングを行なった。以下は出現数が多い語（太文字）を含む回答を抽出した。

**国連**での話を聞くことができ具体的に理解することができた。

**国連**と聞くと難しい印象を持っていたのですが、実は身近な存在であったことです。

**国連**のキャリアについて興味を持ち、少しでも**国連**に関わりたと思った。

**国連**の活動詳しい内容や、様々な活躍の仕方があることを知ることができた。

**国連**の方々のお話を聞いて、英語を利用して社会問題に触れていきたいと思い

SNSで**英語**を使用したコミュニケーションや、**英語**の論文を読む機会がありますが、**英語**で理解する力をもっとつけていきたいと思った。

**英語**が使われていて、グローバルな人材というのは、多少たどたどしくても伝えられる

**国連**の方々のお話を聞いて、**英語**を利用して社会問題に触れていきたいと思い

特に印象に残ったのは3日目の**女性**のあり方についてのお話です。

フランチェスカさんの「**女性が女性**を蔑視しないことが、**女性**が社会参加するための一番大事なこと」という言葉が心に残りました。日本ではまだまだ男性優位で、**女性**の社会進出は世界的に見ても下位にあり

**女性**と男性の格差問題は、非常に考えさせられました。

**SDGs**が特に印象的でした。

**SDGs**について大まかにしか理解できていなかったものが実際の**国連**での話を聞くことができ具体的に理解することができた。

**SDGs**と絡めてどのように物事を考えるべきかを知ることができた。

貧困の悪循環の要素や、コロナの影響で今だからこそより**SDGs**の重要性が高まっている。

### 8.12 コーディングルール

太文字の語に関するコンセプトを数えるための「コーディングルール」は以下のとおりである。

**\*女性**

女性 or 男性 or 格差 or 蔑視 or 下位 or フランチェスカ or 参加

**\*SDGs**

SDGs or 貧困 or 問題

**\*国連**

国連 or キャリア or 活動 or 我謝さん

**\*英語**

英語 or 論文 or 理解 or グローバル or 機会 or 得る

### 8.13 自由記述回答の出現数が多い語

8.11に記載した回答をコーディングした結果、各コードがどの区分で多く出現していたかを次頁のプロット図が示している。

図17のプロットを表した図からは、教育学部と人間科学部の学生のジェンダーとSDGsについての言及が際立っており、国連が扱う問題への関心の高さがうかがえる。ジェンダーへの関心の高さは、参加者に女性の比率が高かった（図16）ことと関係していると推測する。英語や国連に言及している語の頻度からは、特に人間科学部の学生の高い関心が読み取れる。



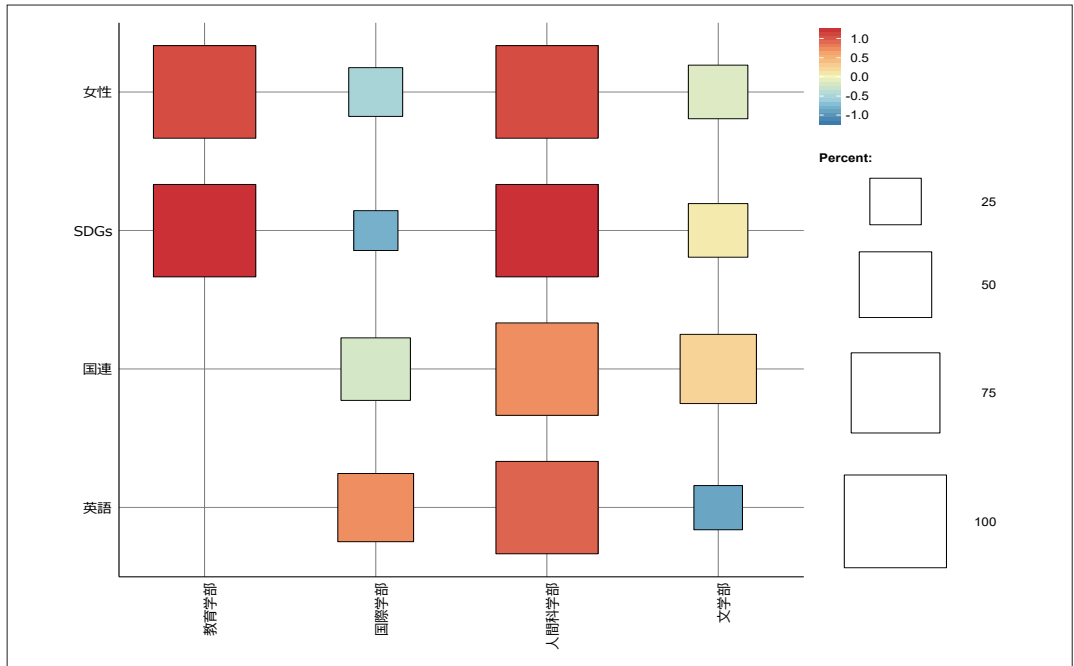


図17 学部別

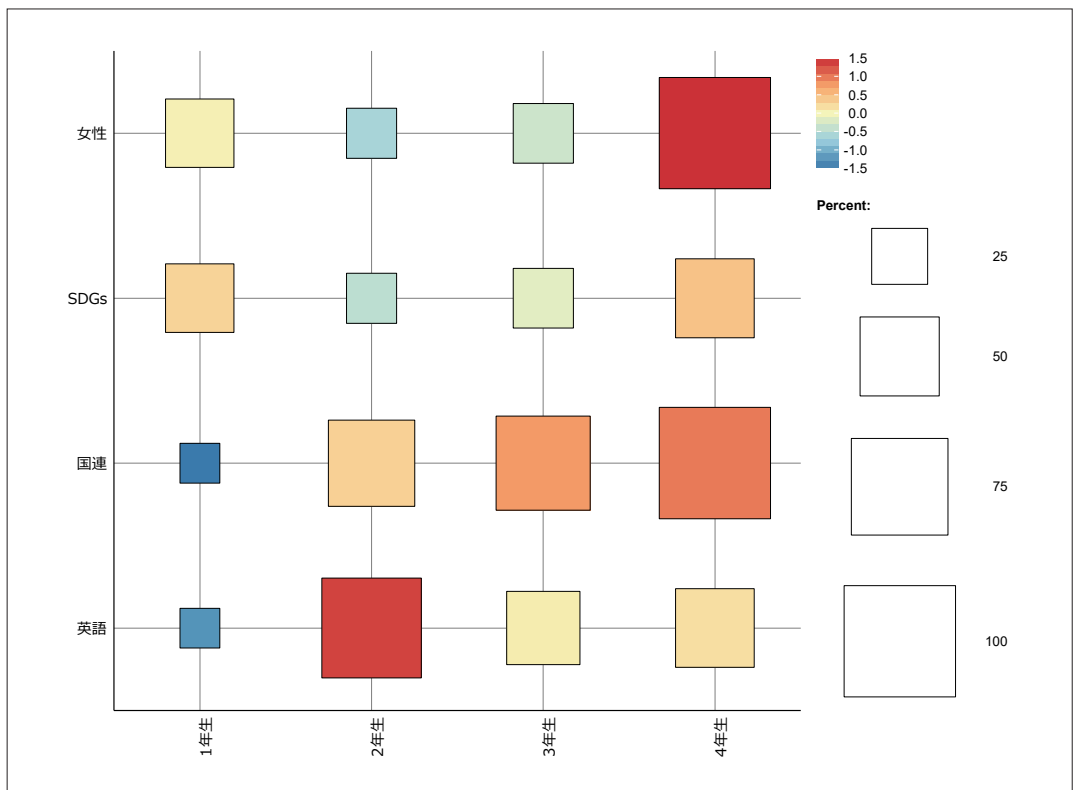


図18 学年別

## 9. 考察

OECD (2015) の「2030年に向けた学習枠組み」の報告によると、VUCA (不安定、不確実、複雑、曖昧)<sup>3)</sup> が急速に進展する世界に直面する中、全ての学習者が一人の人間として全人的に成長し、その潜在能力を引き出し、個人が未来志向になるような教育への責任が大学や教員にはあると考えられる。この研修時間内で扱えるテーマは限られているが、国連の働きを通して世界が直面している問題を学生が自分事として考えることで、今後学生たちが選択する進路において、様々な形で研修の学びが影響し学生自身が積極的に持続可能な社会の実現に貢献できるかもしれない。

研修参加者は国際学部の学生が半数を占めたが、申し込みの段階では健康栄養学部を除く5学部からの申込者が半数近くに及び、国際学部生のみならず他学部生の関心が高いことが明らかであった。図3の希望進路の選択においては、外資系や国際機関に関心を寄せている割合が高く、大学院への進学希望者も一定数見られた。教員志望者の割合も高いのは本学らしい傾向である。

研修中に英語による質疑応答へ積極的に参加している学生を観察したところ、文学部、教育学部、人間科学部の学生の発言回数が国際学部生より多く、多少英語の流暢さに欠けていても質問の内容も他学部生が講師へ具体的な質問や意見をしていたことが印象的であった。(研修動画記録を参考)

自由記述回答からは、国際社会や英語学習への関心を高め、将来の進路を考える上でも影響があったと答えている学生が多いことから、学生の自発的に参加する学習教育環境として、この研修が非常に有効であったこと、文教大学の学部の専門を超えて国際問題や英語に対する高い関心を抱く学生が一定数存在することも確認された。また何よりもオンライン故に参加が可能になった学生が多い事実

からも、SDGs目標4の「全ての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供する」に取り組む大学として研修の継続ができればと考える。

今後継続するための改善点は、参加する学生の専門背景が多岐に渡るため、軍縮などの内容は専門的で理解が難しいところがあったので、できるだけ入門的な内容を選び、講師を選択することが望ましいと思われる。英語と日本語のバランスに関しては、比較的ゆっくりと明瞭な英語で話してくれる講師に依頼が可能である場合は、全て英語で実施できるかもしれない。事後調査に関しては、今回は研修終了1週間後に実施したため、回答者は32名に留まり、参加者の半数にも満たなかったことが残念である。今後このような調査は研修時間終了直後に実施が望まれる。

## 10. 今後の課題

先日、教育用のVR (Virtual Reality / バーチャルリアリティ) を体験する機会があった<sup>4)</sup>。単なるオンライン学習の一種かと思っていたが予想に反し、近未来の学校へ瞬間移動した夢のような仮想空間の体験であった。コロナ禍を経て、実際にはVRではないが、バーチャルツアーと称するオンラインツアーにも注目が集まっている。オンラインでも知見を高めることは可能であるが、現実の異文化を感覚で体験するようなことには限界があると考えていた。しかしAIやVRの技術開発が進むにつれて、仮想現実が人間社会の一部になり、若い世代を中心に違和感を覚えずにVRのデバイスをスマホと同様に携帯し、大学の授業を受ける日も近いと予想する。実際に英語の授業ではすでに実験授業が行われ、その効果が測定されている (Obari, 2021)。

国連研修に関して言えば、例えば国連本部の内部見学やニューヨークの街並み、ロイター社のスタジオの現場など、実際に自分が

その場にいるのと同じ経験を仮想空間で行い、音声やチャットでのコミュニケーションをとることが可能になっている。VRは今後遠隔での研修には欠かせないプラットフォームになるに違いない。すなわちSDGsの目標4、質の高い教育を多くの人と共有するには、デジタル教育環境とICT教育が不可欠になるだろう。しかし、研修の企画や内容を決してAIに任せるわけではなく、あくまで人間がAIを使いこなすことが求められている。教職志望者が多い文教大学のカリキュラムには、最先端のデジタルデバイスを使った体験授業とICTのスキルアップ教育が必須であると思われる。同時に、次代を担う学生たちにとり大事な経験は、現実世界で何が起きているかを知ること、多文化社会に生きること、自分もその世界の一人であるという地球市民を自覚することであり、大学としては、その機会を提供することが重要である。すなわちグローバルシティズンシップ教育の機会として、国連等の国際機関との連携でグローバルな視点からの教育研修を維持する必要があると考える。より多くの学生がオンラインでの参加であってもグローバルな体験の恩恵を受けることができれば、SDGsの目標4達成に貢献しうる大学となるだろう。

## 11. 最後に

第2代国連事務総長のハマースホルド(1974)は、現実的には多くの制約があり、限界があるにもかかわらず、国連は人類が必要とする組織であると述べている。

「私たちは、利害の対立を解決する国際的な試みに建設的な要素を加える存在として、国連を必要としています。また、将来の紛争を防止するうえで、国家以外の、あるいは超国家的な力が影響を与えるための規範を探るといふ、時間と労力を要する試みの基盤、そして枠組として、国連は必要なのです。」(Hamarskjold, 1974, p.374) 15回の国連研

修実施を経てこのことばへの問いは尽きませんが、同意する気持ちも強くなった。

国連研修に参加した学生たちは、将来、社会の矛盾から目を逸らさずに、法を遵守し、平和な社会を願い、異なる背景を持つ他者へ寛容でありながら行動することを願っている。これからも世界で起こる人道問題に関心を持ち、災害の犠牲者に寄り添い、ときには国連への疑問を投げかけることもできる知識と経験を用いて、個人の置かれている社会や周りのコミュニティを良くする原動力になることを期待する。

## 謝辞

今回のオンライン国連研修は、文教大学事務局、国連広報センター、New Yorkの国連本部広報局、ロイター社、国際学部、文学部、国際交流・UNAI委員会、国際交流課の関係者からの多大な支援と協力のおかげで実現した。関わってくださった全ての方に心から感謝している。

- 1) 2021年4月1日施行された「ニューヨーク国連研修」の単位認定に関する内規による。それ以前は「ボランティア論」と「特殊講義A」の2単位として認定。
- 2) CEFR: Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠) <https://www.britishcouncil.jp/programmes/englisheducation/updates/4skills/about/cefr>
- 3) 白井(2020, p.34)は、VUCAを次のように解説している。Volatile(変化のしやすさ): 技術の発展など、我々を取り巻く変化のスピードや範囲が、常に加速していること。Uncertain(不確実さ): 物事や状況が恒常的に変化し、将来何が起きるかを予測することも難しくなって

いること。Complex（複雑さ）：移民の増加など、様々な物事が、単一の要因ではなく、相互に絡み合っている多数の要因によって生じるため、より複雑化したり、解決策を見つけるのが難しくなっていること。Ambiguous（曖昧さ）：物事の意味や帰結が曖昧になり、明快な意思決定を行うのが難しくなっていること。

- 4) 英語教育のバーチャルリアリティソフトウェアを開発しているImmerse社の澤田氏によるVR体験セミナー@生田研究室  
<https://ja.immerse.online/>

#### 参考文献

- Dag Hammarskjöld (1974) *Do We Need the United Nations?* Address Before the Students' Association, Copenhagen, 2 may 1959", in Public Papers of the Secretaries-General of The United Nations, vol. IV: Dag Hammarskjöld 1958-1960, Andrew W.Cordier and Wilder Foote, eds. New York and London, Columbia University Press, p. 374.
- Obari, H. (2021) *The Integration of AI and Virtual Learning both before and under COVID-19*, 経済研究, vol.13, pp.29-47
- Ikuta, Y. (2013) *Bunkyo University Volunteers 2001-2012: Chronicle of Volunteering for International Peace Cooperation*, The International Journal of the Shonan Research Institute Bunkyo University, vol.4 pp.10-22
- Killick, M. (2015) *Developing the Global Student: Higher Education in an era of globalization*, Routledge, London
- OECD (2015) *.Education 2030 Project*
- 白井俊 (2020) 『OECD Education 2030：プロジェクトが描く教育の未来』 ミネルヴァ書房

- 文部科学省 (2018) 教員養成部会 (第100回)  
資料4-2 トビタテ! 教師プロジェクト
- 文部科学省 (2018) 教員養成部会 (第100回)  
資料8-3 Society 5.0に向けた学校ver.3.0
- 日本国際連合学会 (2021) 『持続可能な開発目標と国連：SDGsの進捗と課題』 国際書院